

## 無限と超越についての試論

西井元昭

## 一

日常的によく使用される限りなくとか乗り越えるとかいう意味の語は、それらが無限とか超越とかいう語と類似しているにも拘らず、本質的に限りなくが無限とどのように相異しているのか、また乗り越えると超越とでは如何なる差異があるのかを考えてみたいと思う。たとえば、人の輪が限りなく拡がっていく、という命題における限りなくというのは、空間的に際限なくという意であるが、またこの命題は、人々の共通感情に基づく連帯感もしくは共通の目的意識、或は一種の友情が人と人との心の結びつきを強め、言わば夫々の自己の内における全体的同一化が行われていくとき、このような表現となるのであろう。更にいま一つ

の例を挙げると、私は君を限りなく愛する、という命題における限りなくとは、より深く、極めて深く、どこまでもという意と、時間的に際限なくとか絶え間なくとか、或はいつまでもとか永遠にかかいう意を含んでいる。これらはいずれも、限りなくという表現のうちに、自分の意図や期待、希望や或る種のヴィジョン、更には現在の自分の相手に対する感情(愛情)や気持ちの強調が見られる。気分の強調された表現には、このように限りなくという語がしばしば使用されるものである。従って、人間の気持ちや感情、或は想いの表現としての限りなくが決して無限でないことは誰にもはつきり解ることであろう。無限というのは、私達が日常的に接し得ないものであることは勿論、それを垣間見ることさえ出来ないものである。数量的無限・空間的

無限・時間的無限などを私達が想定することは可能であろうが、それらは単なる想像の域を脱することは出来ないし、また思考による概念的措定としての意味をもつに過ぎない。何故なら私達は限定的にしか事物に接することが出来ないからである。また無限を単に有限の否定としてしか考えることが出来ないからでもある。私達は限定された範囲乃至領域においてのみ事物に関わり、それを感じ、それを意識し、それを把握し或はそれを思念しているに過ぎないのである。更には有限の否定的対立として無限という概念を定立してみても、それだけで無限が明らかになりはしないであろう。私達は次節以降において、全体性・同一性・完全性を超え、更に否定をも超えたところでしか無限性は開示されないことを述べてみよう。

そこでもう一つの語である乗り越えるについての例として、私は一つの難関を乗り越える、という命題を挙げることにする。この命題における乗り越えるとは、自分にとっての或る障害を排除して無事通過することを意味している。この場合、難関とは自分が通り過ぎるのに障害となるものことである。障害の排除というのは、自我と対立する他なるものの排除を意味し、自と他との対立関係を一方的に自我が他を障害として排除することである。従ってこの場

合の乗り越えるとは他なるものの排除を含蓄しているのである。また一面ではこの乗り越えるは他なるものへの自我の優越或は支配をも意味するのである。このような自我の他なるものに対する支配とか、自我による他なるものの排除の論理は、当然自我の暴力もしくは自我論の暴力を正当化することになる。越えるとは上を通っていく、或は一定の程度以上になることであり、そのことから越える、即ち或る限度より上になる、ぬきんで優れているということが生じる。乗り越えるはそれと同義的にまたは類比的に乗り越えるとなり得よう。けれども真の超越は、自我がそれと対立する他なるものの排除・他なるものの支配という暴力によって到達し得るようなものではない。自と他との矛盾対立を越えるという命題は、常に自己の内に他なるものをとらえ、それを他なるエゴとして同一化することによって、自同者が自・他を超越するということの意味しているのである。かかる自我の同一化する作用を通して超越の特権を自我に許すならば、それは自同者の名の下に超越を恣にするようになるが、そのような超越を真の超越と言い得るであろうか。超越とはこの自己の同一性そのものを超えることに他ならないのではないだろうか。自己の同一性はそれ自身有限的であり、真の無限的他者性とはなり得な

いであろう。単なる自己否定的なものが他者性ではないし、真の超越でもない。私達はそういった問題を提出していきたいと思う。

## 二

全体とは諸々の各部分の包括的なものとして定立されるであろう。それ故、内的な世界もそれ自体としては一つの全体であらうし、外的な世界をこれまた一つの全体として考えることも出来よう。従って無限的な全体というものは考えられない。全体とは何ものかの全体としてのみ意味をもつものであろう。

宇宙全体とか、全世界とか、全人類とか、国全体とか、町全体とか、人間の全身とか、全生命とかいうように、私達は何々の全体と言うのであるが、また一方部分をもたない全体も考えることは出来ない。そういうわけで、全体のない部分が意味をなさないのと同様に、部分なき全体もまた意味をもたないのである。ところで、全体と全体性の相異について考えてみると、全体に対応するものは部分であるのに対し、全体性に対応するものは単一性と数多性である。カントの範疇においては、全体性とは単一性と見做された数多性に他ならなかった。その意味では全体性は、

数量的な多数性を単一なものへと合体した總体的なものである。それを言い換えれば全体性とは数量的全体としての単一性のことであった。しかしこの全体性というのは全体との関係において考えられねばならないのである。形式上の全体は部分に対する全体であり、内容上の全体はその諸性質並びに諸様態の全部としての全体であらう。例えば一軒の木造家を一つの全体とするとき、形式上は、屋根・外壁・土台・庭など、更には内部の天井・床・柱・各部屋・廊下・玄関・階段等々がその家の部分であり、内容としては、居間・客室・書斎・子供部屋・台所・洗面所・浴室などの使用目的別の部屋割りや、家の各部分に使用されている建築材料並びに各部屋の付属設備（照明配線・照明器具・火器・冷暖房機など）がその部分をなすものである。続いて全体についての別な観点として、分類上の全体と分析上の全体とが考えられる。例えば世界を一つの全体と考える場合、地域的に北半球と南半球とに分けるとか、東洋と西洋と北洋と南洋とに分けるとか、アジア・アメリカ・ヨーロッパ・アフリカそれにオーストラリアに分けるとかの他、人種別に黒人・黄色人・白人に分けるとか、或は国の体制別には自由主義国と社会主義国と民族主義国とに分けるとか、また経済圏としては資本主義圏と共産主義

圏とに分けるとか等の他、生物と無生物、有機物と無機物、動物と植物と鉱物といった分類などは、すべて世界全体を夫々異った仕方でも分類したことになるであろう。けれども世界という概念は多様であつて、世の中とか人々の集まりとか、また同類同種のものとの関係乃至共存の場なども世界と言われる。そのことから何らかの共通関係をもつもの間も世界と呼ばれ得る。例えば人類の世界・動物の世界・白人の世界・ミクロの世界・医学の世界・文学の世界・絵画の世界・科学の世界・芸術の世界・宗教の世界・趣味の世界等々、まだまだ各種の世界を挙げることが出来る。こういった場合、或る特定の世界全体に対する統一的な、または漠然とした共通の意識乃至考えが世界という概念を形成しているのである。更には、外的世界とか、それに対する内的世界とか、美的世界とか倫理的世界とか宗教的世界とかといった世界観的な意味での世界も存在し得る。このような世界全体は、分類上の世界とは異質の分析上の全体となるであろう。そしてそこには一元的世界に対する二元的世界もしくは多元的世界が出現するのである。その全体とは分析の総合としての全体、二元的乃至多元的なものの総合としての一元的世界全体を意味する。また一方、全体の意味の分析という側面が考えられるのであるが、例えば全

体としての人間を考えると、人間という概念の分析がなされなければならぬ、人間は感覺的であると同時に理性的な動物であるとか、それは知性と感情と意志とを併せもつものであるとか、人間は美的・倫理的・宗教的な生き方を為し得る存在者であるとか、或は人間は精神と身体との両義性に基づいて生存するものであるとか等々といった具合に。かくの如く人間という概念が夫々その意味に従つて分析されたものの総合によつて、全体としての人間の存在様相が明らかにされるのである。そういう点で分類上の全体と分析上の全体とは全体の意味が異なつてくると言えよう。更にまた類的全体というものを考えると、言い換えると類概念を全体とみるとき、その下位概念である種概念を包括するものが全体としての類概念なのである。この場合、類概念と種概念との間には包括・被包括といった関係が成立するのであるが、全体と部分との関係は成り立たないのであるか。包括者と被包括者との関係から、類比的に全体と部分との特殊な関係を導き出すことも強ち無理であるとは断定出来ないのではないか。少くとも類概念が種概念を外延的に包括する限りにおいて、その外延の被包括的種概念は一つの全体としての類概念の部分であると言ふことが出来るように思われる。

ところで、自然につくり上げられたものであれ、人為的もしくは人工的につくられたものであれ、それらのものを夫々一つの全体と考えるとき、それは或る種の構造をもつた全体つまり構造的全体なのである。物質・生体・社会・文化・習俗・言語などをはじめ、あらゆる外的な状態・変化を伴いうるものはすべて構造的全体として定立することが出来る。これに対して構成的全体と称するものが考えられよう。感覚的与件を伴って悟性概念から想像力によって構成された認識論的対象、或は概念的思考によって構成された存在論的対象などがこれに相当する。他方では、超越論的主観性において意識の対象がその志向作用によって意味を付与されたときに構成される意味形成体もまた一つの構成的全体であろう。従って構造的全体が外的な全体であり、構成的全体が内的な全体であると言えることが出来る。構造的全体の場合は、その構造が分解され分析されて、或はそれが生物体であるときは生体系の構造が形態的乃至組織的に分化されて、それらの部分が現われてくると同時に、各部分間の形態的差異や機能的差異といったそれらの関係が明らかとなるのであるが、構成的全体においては、一方では感覚的与件（直観の形式としては時間・空間）と悟性概念（思维形式としての範疇）、並びに想像力とに分析しう

る認識能力によって構成された認識論的対象全体、及び純粋な思考概念による意識現象の全体、他方では意識の意志向の対象と純粹意識との現象学的全体とに分けて考えねばならない。そこには認識主観的な構成と思考概念による構成、及び意味志向的な構成に基づく全体が夫々現われ得る。その場合、全体は単なる部分の集積乃至集合でないことは勿論、各部分の構造的な組み合わせや組み立てによるのでもなくて、構成的全体とは意味的な部分が或る一定の関係性において成り立たせているものごとである。それは、或る場合には想像力によって、また或る場合には思考作用によって、そしていま一つには意識の意味志向作用によって全体が構成されることなのである。関係性において成り立つこの構成的全体は究極的には内的な意味全体となるであろう。そこに自と他との全体というものが現われてくる。自己の内なる他者はその自己と共に自同者に止揚されるのであろうが、自己と他者とは互いに内包―外延・包括―被包括の関係を持續させる。自己内部的には自己と他者とは相互に反照し合い乍ら、差異より同一性への働き、つまり自と他との同一化が進んでいき自同者が出現するのである。自同者はそれ自体一つの全体である。そして自同者は非形象的ではあるが有体的である。この有体的全体と

しての自同者は常に全体性を目指し一つの全体性たらんとする。自己と世界との自己同一的全体としての自同者を完成しようとする。それは、究極的な自同者として完全性を備えた全体、つまり絶対者と同格的存在にまで達しようとすることである。ここに至って、全体とはあらゆる存在の根底をなす本体とも最高の実有とも見做され得るものを意味し、全体性は完全性となり差異は同一性の裏面に隠されてしまうようになる。しかし、かかる有体的な全体性は有限であるばかりではなく、一種の欠如体でもあって決して完全性を備えたものとは考えられないのである。それは不変でもなければ永恒でもない。従ってそれが有限である限り言わば完全性の似姿、描かれた完全像であり得ても真の完全性とはかけ離れた虚像でしかあり得ない。このように自同的全体性は内的であれ外的であれ有限であるが故に、肯定的にも否定的にも単に定立され得るに過ぎないのである。従って全体とは逆説的に有限的欠如体なのである。

## 三

欠如性と否定性とは極めて近似的な関係にあるように思われている。それは恰も完全性と肯定性とは類比的であるのと同様である。しかし否定的なものと共に、肯定的なもの

にも欠如性が存することは誰にも了解されるであろう。そこで私達は否定性について考えることとする。否定を表わす語は数多くあるが、欧米語における否定の接頭辞には *a-, in-, im-, un-, non-* 等々があり、日本語の漢字では否・非・不・無などがある。漢字語の例を挙げれば、否については否定・否決・否認など、非については非存在・非本来的・非ユークリッド・非局所・非被造性(非生成性)・非連続など、そして不については不在・不安・不幸・不定・不死・不条理・不変・不完全・不離・不等・不当など、更に無については無意識・無意味・無限・無限定・無制約・無際限・無条件・無知・無神論等が見られる。或る概念の肯定的名辞または定立された肯定的命題が否定されるとき、否定的名辞または反定立としての否定的命題が現われる。そして非〇〇・不〇〇・無〇〇等というのは肯定概念に対する否定概念の表現であり、それらは形式的には矛盾名辞であつても言語の上ではそれ自身肯定的である。けれどもそれを肯定概念の意味乃至性質の欠如と見做すときはそれ如概念であり、またそれが肯定概念と矛盾するとき矛盾概念となる。論理学における肯定と否定とは命題の真・偽の判定に欠くことの出来ないものである。命題は常に肯定かもしくは否定の形で生まれる。日常的な表現にせよ理論

的な表現にせよ、……である、……ではない、……でしかない、……以外のものではない、……しななければならない、……してはならない、……することが出来る、……しようと思う、……となる、……とはならない等々の如く、命題は肯定と否定とによって成り立っている。我々の言語生活における伝達の意味内容はこの肯定と否定とのバランスによって構成されているのである。そして日常的には、否定の否定は一つの肯定の意味を表わしており、肯定の表現に或る種のニュアンスをもたせるレトリックとして使用される表現でもある。しかし論理的には肯定名辞又は命題に対する否定名辞又は否定命題を否定することは、概念上必ずしも元の肯定名辞又は命題に戻ることにはならない。否定の否定は肯定と否定との関係そのものの否定を意味する。通常では否定名辞乃至命題を否定するということは、否定された最初の否定名辞乃至命題が否定されることによつて否定的に表現された一つの肯定を意味することになる。このような形式的な相対的關係は肯定対否定の關係と同一線上にあるものである。けれども肯定と否定との相対的關係そのものを超えることが否定の否定に付与されるべき意味であろう。

事物の内的矛盾は、自己の内なる他者、つまり自己肯定

に對する否定として現われる他なるものの否定的媒介によつて、新たな自己となるという自己展開に欠くことの出来ないものと考えられている。そこに否定の否定が絶対否定の名の下に強調される所以があるのである。定立と反定立との綜合も、否定の否定を通して止揚された矛盾統一の働きのよつて自己同一の全体の完結が見られるとするヘーゲルの思考に他ならない。だが、ここに見られる自同者の論理は他なるもの即ち自己の内なる他者を自己展開の否定的契機としてとらえているが故に、そこに眞の否定的他者は現われてはこない。自同者は、絶対否定の名の下での否定の否定という内在的否定によつても自と他との内的矛盾を超えることにはならないであろう。自己完結的な全体性によつて基礎づけられた自同者は自己と他者との關係を超えることが出来ないのである。絶対否定とは否定の否定ではなくて、言わば肯定なき肯定であり否定なき否定を意味する。それはまた肯定と否定との關係性そのものを超えた絶対否定としての超越に他ならない。従つて超越とは肯定と否定との相対的關係の否定としての否定の否定をも超え出ることになる。否定性の本質の意味は、單なる否定の意でないことは言うに及ばず、否定の否定という意味ですらない。眞の否定性とは否定なき否定としての絶対的否

定としての超越を意味する。超越は否定性にあらずという命題は通常の意味ではその通りであらうが、否定性を絶対的否定と考えるならば超越は正しく否定性であると言うことが出来るのではなからうか。超越が単なる否定でないこととは言うまでもないが、自己のあらゆる障害、あらゆる条件やあらゆる状況から逃れることでもないし、否定性が単に自己の条件乃至状況からの否定的逃避やそれらの否定的排除でないことも当然である。従って自己の内なる他者の否定もまた否定性とは言い得ない。否定性とは、自己の内なる自と他との相互否定的なものを内において超えるという否定の否定ではなくて、外へ超えるという超越としての絶対否定を意味する。この外へとは彼方へのことでもあるが、しかしそれは外界の時空間的場即ち外的世界へということでは勿論ない。それはかかる外的世界も内的世界も超えたものとしてという意味であると同時に、自己の内なる自己の世界と自己の内なる他者の世界との総合された自同者的世界をも超えた外へなのである。その意味で否定性は絶対否定としての超越の働きであると言わねばならない。この外というのは、自同者の自己性(肯定と否定との自己同一性、自と他との相互否定を超えた否定の否定としての自己同一性)の外という意味に他ならず、真の否定性と他

者性との意味を指示する記号でもある。この特定の意味での外在性を示す外にこそ真の否定の働きでもある他者の働きとしての他者性が現われるのである。他者性とは無限性として、自己の有限性或は自同者の有限性に対してその外であり超越でもあらう。私達はこの無限性について更に論述しなければならぬ。それには先ず、限定に対する無限定・制約に対する無制約・条件に対する無条件・有限に対する無無限といった無限と極めて類似的な概念について考えてみたいと思う。

#### 四

我々は有限に対して無限という概念をしばしば挙げるのであるが、有限と無限との単なる対比でのみ無限を考えることは無限性の真の意味をとらえていないのではなからうか。有限とは文字通り限界を有することであり、それはまた限られた存在を指示する語でもある。通常はこの有限と対立した形で無限の概念が、即ち限界のないこと或は限界をもたない存在を想定することによって無限の概念が導き出される。無限概念については、数における、つまり自然数一・二・三…… $n$ における任意の自然数 $n$ に、一・二・三……と限りなく自然数を増加しつつ順次に加えていく



ことよって無限な数の序列が考えられるが、それらの数を一括して自然数全体という集合の概念が生まれた。ここに有限集合に対する無限集合の概念が生ずるのであるが、それは有限集合との対比によつて名付けられた、有限を越えたという意味よりも有限の否定概念という意味での数的全体のいま一つ概念に過ぎないのである。有限を越えたものとして想定された無限と雖も、有限と無限との関係性そのものを超えているとは言いきれないであろう。無限の概念を単なる有限の否定によつて有限を越えたものと考えらば、その無限は一つの想定された無限であつて、真の否定性並びに無限性の意味はそこに存在しない。無限性とは、有限の単なる否定でもなければ、有限を単に越えるということでもなくて、有限と無限との関係の外へ、超え出たところにおのずから起こる無限の働きのことなのである。そこで無限と類比的な概念である無限定(無規定)と無制約及び無制限について順次述べることにする。

無限定とは何らかの規定或は制限を蒙っていないこと、決定されていないことを指し示している。またそれは概念の定義付けの否定でもある。それでは無限定が非決定の状態を表示しているのであれば、それは果たして未決定を意味しているのであろうか、それとも不可決定つまり決定さ

れ得ないことを意味しているのであろうか。もし前者のように無限定が未決定を意味しているとすれば、それはやがて決定されるであろうという可能性を含んでいることになり。また後者のように無限定が決定され得ないという決定不可能性を意味しているとしても、これまた決定され得ないという規定を受けていることとなるであろう。無限定とは無規定性のことである。もし無限定があらゆる決定論の否定としての非決定論的意味をもつものであるとするならば、それは選択の自由と共に無関心の自由までも許す自由意志の根拠ともなり得る。ところで無限定が限定の否定である限り、無限定は限定との対比によつて何らかの規定性をもつこととなる。それは無限が有限との対比によつて有限の否定という規定性をもつと同様である。更にもし無限定が否定であるとするならば、無限定は否定の否定ということになりヘーゲル的には絶対否定ということになるであろう。けれども先にも述べたように、絶対否定とは単なる否定の否定ではなくて、否定なき否定であり肯定なき肯定である。従つて無限定は限定の否定であつてもまた否定の否定であつても決して絶対否定としての否定なき否定ではあり得ないのである。

次に、無制約とは言ふまでもなく制約に対するもので制

約の否定である。制約という語については、一つにはAが存在するが故にBが存在し、Aが存在しなければBは存在しないとき、AはBの制約(者)であると言われ、またもう一つには、……ならば○○である、という仮言判断において、前件……は後件○○の制約(条件)であると言われている。或る条件によって事物が生起したりその性質が変化したりするとき、その条件が制約となるのであろうが、実在的には現象の生起或はその変化とそれら生起もしくは変化の原因との関係、或は現象の生起・変化とその条件との関係は必ずしも一定の関係にあるとは言い得ない場合がある。結果の原因が明らかでなく、幾つかの不明の原因によってその結果が生ずるようなこともあり、またその諸条件がすべて明確であるとは考えられないこともあり得る。従って因果関係或は理由と帰結との関係が論理的に明らかだとしても、現実的或は実在的にはその関係が明確でないことが多くあるものである。しかし複雑な組み合わせによる複合的諸条件の下で一つの結果が現われる場合でも、制約者と被制約者との関係は保たれているであろう。如何なる現象と雖も網の目のような諸条件の関係性の一部に過ぎないとすれば、縦横に張りめぐらされた制約者と被制約者との限りなき連鎖を想定せざるを得ない。たとえ無限後退

の誘(そ)いを免れないとしても、この連鎖を断ち切ることは出来ないのである。いまここに、制約と無制約との対比において理念的存在としての第一原因乃至無制約者を想定してみたとしても、それだけで真の無限性や他者性を露(あらわ)にすることは出来ず、せいぜい有限と無限との対比を通して類比的に制約と無制約との関係を推し量るしかないのであろう。何ものにも制約されない無制約者つまり神を定立することによっても無限性は決して明らかとはならないのである。たとえ無制約者という理念的な存在を真の無限性と類比的に関連付けたり結びつけようとしても、無制約と無限との関係性は明確になりはしないであろう。

ところで、無限限についてであるが、これは勿論有限に對して用いられる語で無限と類似的な意味をもつ。量についての有限に對する無限と、拡がりについての有限に對する無限とが考えられるのであるが、それとは全く別な意味において無限と無限との根本的な相異も見逃せないであろう。量の抽象されたものが数の概念であるが、正の整数と零との全部が自然数と言われ、それらは夫々加減乗除によって或る数は正の整数又は負の整数に、或る数は分数又は小数に、或る数は平方根乃至立方根の小数又は正の整数になる。そして一般に自然数においては、一・二・三：

…… $n$ の順序で数えられ際限なく序数が積み重ねられるものである。東洋では古くから四桁毎に壹より始まり、万・億・兆・京・垓(十の二十乗)、続いて稊・穰・溝・澗・正(十の四十乗)、更に載・極・恒河沙・阿僧祇・那由田(十の六十乗)に至り、最後に不可思議(十の六十四乗)・無量・大数(十の六十八乗)まで数が名づけられていた。勿論、無数とか無量とかの語は天文学的ではあるが、一方では有限な数又は量を示すと共に、他方では無際限な数量つまり数えることの不可能な数又は量という概念をもつものであった。ところで任意の自然数 $n$ の二乗・三乗…… $n$ 乗というように無際限にその乗数の数を増すことも出来れば、 $n$ の除数の数を無際限に増すことも出来るであろう。従って自然数は無際限にその数を伸ばすことも、また自然数を無際限に分割することも可能であろう。更に零と一との間、一と二との間……以下各序数間にも無際限に小数を増加させることも出来る。例えば円周率の小数点以下を百桁にすることも、更に無際限にその小数を書き加えていくことも可能である。量の全体の無限分割は理論的に想定し得る。全体の外部に無際限を仮定し超限の概念を導き出すことも出来よう。しかし有限としての量の全体を超えた無際限と雖も、それが有限と無際限との対比を通して得られた、有

限の単なる否定つまり有限を超えたものとしての無際限という概念である限り、私達の提唱している無限性とは同一ではないのである。それは丁度、有限を超えているという意味での有限の否定としての無限が無限性と同一でないのと同様である。拡がりとしての空間の無限・時間の無限は、たとえそれが有限を超えているものと仮定してみても、有限の否定であることには変わりはない。感覚的与件から抽象された空間の無限・時間の無限は、それが主観的であろうと客観的であろうと、また超感覚的であろうと超主観的であろうと、有限より導き出された一つの問題であるが故に、有限と無限との対比・対立乃至関係性そのものの外へ超越した無限性とは区別されなければならない。また無限性とは有限と無限との対立を止揚した綜合を意味するものではない。止揚する働きは一つには否定すること、もう一つには保持すること、更にいま一つには高めることであるから、それは双方の現われ或は外面的なものとの相互否定の否定と双方の内容的側面の保存高揚による綜合なのであるから、その働きは双方の対立の自己同一的否定の働きとしての自己の内部における作用の展開を示しているに過ぎない。先にも述べたように、否定と否定性、無限と無限性とは厳密に区別されなければならないのである。肯定と否定

との対立、定立と反定立との対比を超える働きとしての否定の否定を含む否定と、否定なき否定つまり否定する何もものもない否定（何ものでもないもの）としての否定性とが異なっているのと同様に、有限の否定としての無限定・無制約・無際限・無限と、有限対無限の関係性そのものの外へ超出した無限性が全く異質のものであることを、私達はここで確認しておくなくてはならないであろう。

## 五

私達は内在という語に対して超越という語をよく用いるのであるが、一方内在性に対して外在性という語も使用することがある。超越とは勿論、何ものかを超えるまたは越えることであるが、それは何ものかを超え出る、とび越える、脱する、離脱する、脱出する、更には外へ超え出ること等を意味する。外国語においては、この超に当たる接頭辞に *super-, sur-, over-, über-, trans-, extra-, hyper-, meta-, ex-...* などがあるが、そのあとの語つまり何ものかが何であるかによって語全体の意味が異なってくる。例えば超自然 *supernaturale* (*supernature, Übernatur, supernature*) という語の場合、それが自然とは何かということによって異なった意味となるのである。これはもともとカ

トリック神学上の用語として用いられたものであるが、その場合自然とは被造物である人間の物質や自己からの生成、自己完結への目的などあらゆる自然的事物、人間の理性・感情・意志とかいったものを意味し、それらを超えた真の無償性としての恩寵の現われ、聖書によって示された行為、神の言としてのロゴス、更にはキリスト教的奇蹟等々が超自然と言われる。このような自然と超自然との対比は、自然の光と恩寵の光との対比と共に、自然神学と啓示神学との対比をも想定させることになる。その他、非キリスト教的神秘思想から超自然を考えることも出来るであろうし、またその他の観点からこれを見ることも可能であろう。例えば人間の創造性を超自然と見做したり、人間の自由意志が自然必然性を超えているとか、人間の権力意志が超人としての超自然を示しているとかいった見方も可能であろう。いずれにせよかかる超自然が自然を超えているものとしての自然の否定である限り、それは真の超越とは言い得ないのである。

ところで超感性的 *übersinnlich* という語についてであるが、感性的とは、感性によってとらえ得るということ、認識能力の一つである感性を伴うということ、更には身体的な感覚に基づく衝動とか欲求とか、或は心理的な一種の

感受性―刺激に対する反応としての感覺内受容性によるとか、いう多様な意味をもつものである。それらを超えるということが超感性的という語の意味であろうが、それは一つには感性とは何ら係わりをもたないという意と、もう一つには感性界とは全く異質の世界に属するという意とに分かれる。前者は感性の否定を通して思惟による論理的或は抽象的概念の性質を表わす語であり、後者は感性界を超えた理念的な世界つまり叡智界に属していること、形而上学の対象としての靈魂や超越者と共に同一性や差異または自己と他者との問題に及ぶ抽象理論の性質を示す語なのである。更に、我々が超主観的 transsubjektiv と言うとき、その主観的という語は曖昧に用いられることが多く、一般には特定の事柄に対する個人的な観点に立つ場合という意味に使用されている。そういうった観点から全くかけ離れたということが超主観的という語で表わされ、時には普遍的乃至客観的という意味に転化されることもある。主観とはもともとラテン語の *subjectum* つまり下に置かれたもの・土台・基礎ということでギリシャ語の *ヒュポケイメノン* を意味し、作用の対象としての事物並びにその性質・状態を支える精神的存在在即ち思惟的存在者乃至人格的存在在が主観と言われてきた。しかし近代以降は感覺を備えた存在在又は魂

を主観と呼ぶようになったのであるが、他方ではそれは經驗を制約する法則の統一としての認識論的主観、つまり意識の超越論的(先驗的)統一としての純粹統覚(超越論的統覚)乃至意識一般の働きを意味し、主観の自発的作用によるこの統一は常にコギトを伴っているので、自己意識としての純粹我を統一作用の基礎に据えていることになる。従って主観は究極的には純粹意識としての我そのもの(純粹我)ということになってしまったのである。要するに主観性とはこのような主観の自発的な働き(統一作用)という意味になった。しかしながら、主観と客観との対比を通して主観を超えるということは、一方において主観の対極としての客観の方へ超えるということと、他方では客観的世界を構成している意識としての主観を超えるのであるから、当然その客観的世界も超えているということとの二重の意味をもつことになる。かくして、主観が単に特定の乃至個人的意識の内容を意味するとすれば、超主観的とはその個人的意識内容や個人的体験内容を超えた、つまり個人的意識から独立した超越的なもの或は普遍的・客観的なものを指していることになる。また主観が自己意識である場合、超主観的というのは自己意識を超えた或る種の超我乃至超脱(*transcenduntia*)を意味する。いづれにせよ、

私達は超主観的という語を、一応主観と客観との関係そのものの外へ超えていることを指示する語と見做しておくことにする。

もともと超越には、人間存在の限界状況の超克という意味と、自己と他者との対立、つまり両者の相互否定的矛盾対立を超えるという意味とがあるであろう。超越つまり transcendencia というラテン語は trans という接頭辞と scendo という動詞とが一つの動詞 transcendendo となり、登り越す、越えて行くという意味の名詞化されたものであって、それは上昇性と超越性との二つの意味をもつようになったのである。またそれと類似的な動詞に transgo 彼方へ行く、越す、渡るというのがある。このように Trans という語はを越えてという意との彼方<sup>こゝろ</sup>にという意との両面をもった前置詞並びに接頭辞なのである。尤も越えてという語と彼方へという語とは同義的に用いられる場合もあるが、それについては少し後で述べたいと思う。次に漢字の超はもともと高く上がるという意の陟<sup>のぼる</sup>から由来し、それから派生してとびこえる、とびぬけるといふ意味をもつに至ったのに対し、越はその語原の踰<sup>こ</sup>こえる、こす、わたるから由来し、ものの上を通っていくといふ意味になったのである。このように超越という漢字語は、かけ離れている

こと、すぐれぬぎんでいること、世間の俗事から離れること、とびこえること等の意味に用いられているのである。いづれにせよ、超越は一方では上昇性、他方では彼岸性を孕んでいるように思われる。超越する、超えるには上昇することが先ず必要であり、超えられるものを通り越すまたは渡る先<sup>まへ</sup>つまり超えたところ(到達点)が彼方、向う側としての彼岸なのである。超えられるべきもの、越えるのに障害となるものは、具象的には山であり谷であろうし、また森林であり河川でもあろうし、湖沼や大海でもあり得よう。それらは超えらるべきものの象徴として描かれることはあろうが、本質的には超越とは自己による他なるもの排除ではない、つまり単なる自分の環境条件の排除でないばかりか、自同者による自己の内なる他者の排除でもないであろう。排除 excludo、排除する excludo というのは、excludo……から遮断する、囲いから外へ閉め出すという意味であり、自己による他者の排除とは自己或は自同者から他者を遮断する、自己の外部へ他者を閉め出すということである。かくして自らは自己と他者との総合を通して内的な自同者となることは他者の排除を伴うことであって、閉ざされた自己性の内部で完成された自同者たらんとすることに他ならない。それはどこまでも内在者であって超越

者ではないのである。内なる自己と内なる他者との相互否定的対立を越え出るとは、自己性の回路の外へ越え出ることであり、超越者としての他者は自己性の回路における内在的自己でも内在的他者でもないばかりか自同者ですらない。超越的他者は従ってかくかくのものと規定された他なるものではない。それは彼方における他者、超越的外在的他者であり、自己性の外なる他者、世界の外なる他者なのである。ここに他者性 *Alteritas* (*Alietas*) 即ち超越の働きが出現する。他者性とは、自己と他者との関係性(自己性の回路)の外へつまり彼方へ越え出る超越の働きを意味し、超自然的・超主観的であり、超自同者的・超意識的・超理性的であると同時に、無限的でもある。無限的とは前節で述べた無限性を備えたという意味である。これをレヴィナス風と言うよりもデリダ風に無限的他者性と名付けておこ

う。従って無限性が有限に対する無限、有限の否定としての無限ではなくて、有限無限の規定の外なる無限性つまり無限な働きであるが故に、無限的とは無限の働きとしてのということなのである。また他者性とは自に対する他なるものとしての他者であることではなくて、自己と他者との関係性の彼方における他者性つまり他者の働きなのである。かくして無限的他者性を言い換えると、無限な働きとしての他者の働き、つまり無限な働き即他者の働きなのである。従って超越とは外への超越、彼方への超越を意味するのであるが、それは自己の超越でも単なる他者の超越でもない。無限的他者性としての働きが超越なのである。超越とは無限的他者の働きによって彼方へ渡らせる *transmitto* ことである。私達はこれを西欧的な到彼岸の意味としてここに記した所以である。

(本学教授 フランス文学・哲学)